

北方の冬 高島高論

金山 克哉

一、〈冬〉と詩

井上靖の有名な「青春」(『季節』講談社 昭和四十六年十一月)という詩。若き日の靖が詩を書いた一枚の原稿用紙を懐に入れ、田舎の中学教師をしている詩人のもとを訪ねるシーンからこの詩は始まる。夕食をご馳走になり詩人宅を辞し、吹雪く中、マントを目深にかぶって駅へと急ぐ靖の姿が目につかぶ。「石動」という駅でストープに身を寄せながら終電車を待った記憶が、四十年の間に幾度となく思い出された靖は言う。小説家として名をなす以前の、詩心を豊饒にたたえた一人の青年の姿がここには描かれており、富山県「石動」駅はいつまでも雪降る記憶の中で駅のストープの温もりとともに灯り続けている。井上靖にとつての〈冬〉は、自身の詩的出発を彩る記憶の中で生きている。

同じ井上靖の詩に「雪」(『運河』筑摩書房 昭和四十二年)がある。

雪が降って来た。

鉛筆の字が濃くなった。

こういう二行の少年の詩を読んだことがある。十何年も昔のこと、「キリン」という童詩雑誌でみつけた詩だ。雪が降って来ると、私はいつもこの詩のことを思い出す。ああ、いま、小学校の教室という教室で、子供たちの書く鉛筆の字が濃くなりつつあるのだ、と。この思いはちよつと類のないほど豊饒で冷徹だ。勤勉、真摯、調和、そんなものともどこかで関係を持つている。

「雪」と「鉛筆の字」との詩的な関係。子供たちの書く字が濃くなることは「勤勉」「真摯」「調和」との結びつきがある連想するところ、人間の人間たる豊かさを想起する靖の感受性が見てとれる。字を書く、という学習の基本の中にある学びへの姿勢、一面ずつを丁寧処理する誠実さ、余白と軌跡とのバランスなど、そのまま人生全体につながる人間的な尊厳がこの詩の中に息づいている。井上靖にとつての〈冬〉とは、この二つの詩に見られるように独自の静謐さをたたえたものであった。

また、近代の詩人中原中也は「冬の夜」(『在りし日の歌』昭和十三年)において次のように歌った。

空気よりよいものはないのです

それも寒い夜の室内の空気よりもよいものはないのです

冬の夜に、ひとり室内の空気の冷たさを感じ入る詩人の姿が髣髴とする。

例えば、井上靖と中原中也。彼らは〈冬〉を自身の感覚や記憶に惹きつけて見事に変奏して見せ、詩の言葉に定着して見せた。逆の言い方をすれば、詩の表現だからこそ〈冬〉に独自の滋味を加えることに成功している。

高村光太郎もまた、「冬が来た」(『道程』大正三年)の中で「きつぱりと冬が来た」とうたう。

冬よ

僕に来い、僕に来い

僕は冬の力、冬は僕の餌食だ

ストイックな姿勢で「冬」を受け止める「僕」の姿勢は大概に満ちている。その他にも『測量船』(昭和五年十二

月二十日)所収、三好達治の有名な二行詩「雪」(太郎を
眠らせ太郎の屋根に雪ふりつむ。/次郎を眠らせ次郎の屋
根に雪ふりつむ。)なども日本の民族的な(冬)が描かれ、
そこはかとない空間の広がりを感じられる。

ときに、季節とは何か。殊に、厳しい冬はなにゆえに我
々のもとにやってくるのか。冬の存在は我々の精神に何を
もたらすのか。そのような疑問のもとに本稿は書かれてい
る。

そして、郷土富山の詩人である高島高もまた(冬)を多
く描いた人である。明治四十三年(一九一〇年)富山県滑
川市に生まれ、小学、中学、高校時代を富山で過ごし、昭
和三年(一九二八年)に日本大学予科に進学、東京で文学
に親しんだ。医師であった父の願により、日本大学を中
退、昭和医学専門学校(現・昭和大学医学部)に入學し、
医師としての資格を身につけ、横浜市の電気局病院の内科
医として勤務。のち、父逝去により富山に戻り、地元滑川
の医院を継ぐことになる。

萩原朔太郎をして鴉のような風貌を連想させ、その「鴉」
が「今この詩集の中で、北国の暗い森や、氷の張りつめた
平原や、白く雪に光る山脈の上を飛びながら、ニヒリスト
の哀切な悲歌を歌っているのだ」(高島高『北方の詩』「序」)
と言わしめた高島。方法的には「詩と詩論」に見られる新
散文詩運動の流れを組むものであったが、その描かれる対
象は多くが北アルプスであり、太古から変わらぬ明滅を続
ける蛭島賊の群のすむ滑川の海であったりした。また、立
野幸雄は詩集『北方の詩』について、「立山連峰に託した
もの」であり「北国の山々を力強く男性的に歯切れよくう
たい」「風土に根差したロマンが胸を打つ」とする。高島
は富山に戻った後も、自らが編集した「文学国土」「文学
組織」において白蠟色に染まる立山の姿に幾度となく触れ
ている。

本稿では、高島高の詩における(冬)の位相について考
察し、改めて「冬の詩人」としての姿をとらえなおしたい
と考える。

二 鑑賞「北方の詩」

高島高の第一詩集である『北方の詩』(ボン書房 昭和
十三年七月)には四十四篇の詩が収められている。そのう
ち冬の詩が十八篇、春の詩が二篇、夏の詩がなし、秋の詩
が一篇であった。また、特定の季節に分類できない詩が二
十三篇であった。どの季節を選択して詩を書くか、という
問題はその詩人の資質に関わる重要なテーマとなる。では、
高島高の詩の特徴とは何か。虚構(文学)だからこそ描く
ことができた(冬)とはどのようなものであったかを考え
たい。

山脈を馳けてゆく白馬のむれがある

空は虹のパンセを孕んでか

朝あけは雲など呼んで

いま山麓の雪を踏む牛群

草は見えない

この冷却の皮膚下に

草は生きている

このひろびろとした高原は生きている

ほのおするものは—— 水だ

はりつめてこわれそうな

この十行で書かれた短い詩は、萩原朔太郎、北川冬彦が
序文を書いた第一詩集『北方の詩』(ボン書房 昭和十三
年七月)の巻頭を飾る高島高の代表的な作品である。

「馳けてゆく白馬のむれ」はイメージであらうか、写実
であらうか。大事なことはその判断ではなく、この詩の中

には確かに白い馬たちが息づいているということだ。「空は虹のpanseを孕んでか」、七色の思考が山脈の上の空を彩り、晴れ間が広がっていく様が想像できる。朝の虹はほかに雲がかり、「牛群」が山麓に息づく。詩の前半は雄大な北の山脈の姿が生き生きと描かれる。

しかし、この詩の魅力は後半にこそある。「草は見えない」という一行から、雪、つまり「この冷却の皮膚」が草原をすっかり覆ってしまっていることが理解される。「この」とあることから、視点が雪原に接近していることが伝わってくる。草は隠されているけれども確かに雪原の下に存在し、見えないけれどもまさに生きている大地の鼓動のようなものが伝わってくる。高原そのものが生きているという表現から、山そのもの、冬そのものが生命をたたえた存在であることが見てとれる。そして何よりも、「ほのおする」という動詞がこの詩の核となる。「ほのお」という名詞を動詞化して創られたこの独自の詩語は、おそらくは「いのちを燃やす」という意味を持ち、「氷」はその冷たさを増せば増すほどに「氷」としてのいのちを燃やしているということになる。燃えているものは寒冷の象徴である。「氷」である。冷たいものが燃えている、という一見矛盾した論理になるが、「氷」は「氷」としてのいのちを燃やしている。そしてその「氷」はあくまでも「はりつめてこわれそうな」緊張状態である。硬質な緊張が創り出す清冽なもろさ。「ほのおする」ものの健気なまでのいのちの燃焼と、その代償としてのいのちの儂さが両義的に含まれている。

あらゆるものが「ほのおする」北の山脈世界。高島高が描く〈冬〉の世界には、冷たくも燃え、夾雑物の介入を許さない清澄な自然の厳しさがあ

詩集『北方の詩』には二篇の春の詩がある。冬の詩が圧倒的に多い中で春の詩。そのうちの二つ、「早春」を概観したい。

早春

きれぎれにみだれ飛ぶ白雲
柵にもたれてじつとみつめている
草を喰んではものうげに見上げる
まだら牛等の瞳

網膜には雪解けの山々がものかなしいのであろうか
牛等はだまり合い
くる土の湿りを踏んでいる
いつの日きえてゆくおもいであろうか
いつの日とけてゆくうれいであろうか
めまぐるしくながれる生活の日々
たとえばほてる血潮のように
それはせきこむ流れのように
ただあてどなくかき狂い押しながされてゆく日々だ

この詩は長さといい、登場する動物といい、「北方の詩」の春バージョンだと考えることができる。また、そのように仮定して双方を比較してみると、いくつかの違いに気づくことができる。

「北方の詩」では「白馬」は山脈を駆けてゆき、「牛群」は雪を踏みしめている。冬山の幻想的な情景から詩が始まっていたが、「早春」では「牛等」は「柵」に閉ざされているのか「ものうげ」であり「だまり合」っている。そこには「北方の詩」に見られるような躍動感を感じられない。また、詩の後半部分の比較をしてみても、「北方の詩」においては、「冷却の皮膚下」には確かに息づく生命力が感

三 〈春〉と〈冬〉の比較論

じられ、「ほのおする」ものとして氷もまた寒冷なる存在としての自身の在り方を十全に生きている。しかし、「早春」後半部においては「めまぐるしくながれる生活の日々」の中で「ただあてどなくかき狂い押しながされてゆく日々だ」という、詩的なイマジネーションの飛躍というよりは、生活苦の中に埋没する想像力の硬直が描かれているように感じられる。

「早春」には春が訪れたことに対する喜びや明るさはない。むしろいかんともしがたい無為の日々に対する空しさばかりが描かれているようにも思われる。かつ、冬の厳しい寒さが和らぐことによつて、寒冷の中に保存されていた「はりつめてこわれそうな」いのちの存在そのものも緩和されて失われてしまったような印象をうける。弛緩した

（春）の姿がここにはある。
だから、「北方の詩」に描かれた（冬）は、いのちの燃焼を厳寒の中に保存し、それが溶け出して流れてしまわないうようにする、一種の「いのちの燃焼を閉じこめておく冷蔵庫」のような役割を果たしているのではないか。春の暖気の中では感じることでできない存在の確かさが、まさに（冬）の冷気の中でこそ冴え返って息づくものとして認識されているのではないか。

四 （冬）の諸相

高島高は「麵麴」の活動を通じて北川冬彦と知り、「詩と詩論」が提唱した新散文詩運動、短詩運動の理論を自らと詩法の中に取り入れた。『北方の詩』には様々な詩形が実験的に盛り込まれており、高島高の詩の特徴を形作っている。この章では、言語芸術として様々な方法で描き出され、認識された（冬）の諸相について触れていく。

北方の冬

1 枯木をめぐる風は日に日に捨て残された落葉等をさらに
蝕ばんでゆくのであった。其処の陰影にある水溜りについで
幾たびも暗い雲等は何か噂し合つては流れていった。浸
潤された地層よ、

2 落葉の色にしみた地層の腐敗物質について枯枝の上で終
日小鳥は考えこんでいるのであろうか。ときには盲いた風
がその掠毛をささきびしく吹きながつていったのだった。

3 小鳥はもう飛べないのかもしれない

4 思い出してからもう十日。はるか剣氷の刃をかすめて冬
ごとに幾年も幾年も私は待つている人のことを。

5 鉛色に截断された風景を截断する水溜りの上の枯枝の上
で小鳥は終日考えこんでいた。

「陰影のある水溜り」「暗い雲」「剣氷の刃」「鉛色」などの詩語に北方の灰色の冬が思い出される。色彩のイメージは重く暗い。そして「浸潤された地層」は「腐敗物質」を含み、あらゆるものを腐らせ土に還せようとする。生命が解体されてゆく冬の姿が寒々と描かれ、「小鳥」は飛び立つこともできず「終日考えこんでいる存在としてあくまでも静的である。この詩は昭和十一年（一九三六年）、高島が昭和医学専門学校卒業後に「麵麴」に投稿した作品である。

また、『北方の詩』には様々な短詩が存在する。

雪崩

何喰ぬ太陽が
ボンヤリ照っている

この詩は雪山における雪崩の危険性をスナップ風に描くユーモアがある。「何喰ぬ太陽」のもとで今にも雪崩が起きそうな危険な風景が描かれる。雪崩の危険を全く気にもしない「太陽」との対比が面白い。

吹雪

目をたたたく
唇までたたたく
そしてゆき過ぎる

激しい勢いで吹き付け、過ぎ去っていく吹雪の様子を「たたたく」という皮膚感覚で表現しようと試みている。「雪崩」も「吹雪」も（北方）世界の部分的な要素を切り取って結晶化している。限定された言葉による簡潔な世界が逆に、（冬）のある一面を鮮明に描き出している。

五 東京と（冬）

これら（冬）の詩を所収した『北方の詩』は、昭和十三年七月に東京の豊島区にあるボン書房から出版された。今ここで問題にしたいことは、これら（北方）（冬）を満載した詩集が、高島が東京にいるときに、東京の出版社を通じて世に出ていることである。その事実から読み取れるいくつかの仮説をここで示したい。

まず、東京にいたからこそ言語化できた（北方）があったというのである。「北方の詩」のイメージネーションは、故郷の言語で写実的に北国を描いたものとは明らかに異なる詩の言葉としての（北方）は、生まれ故郷の外に生活せられた言葉としての（北方）は、生まれ故郷の外に生活する経験をした者が持ち得る対象との距離を保っている。その距離が「北方の詩」の前半部分の幻想性を生み、後半部分の生命観の力強さを支えていると私は考える。かつ、（北方）というモチーフを言語化するにあたってモダニズムの手法を『北方の詩』に柔軟に取り入れた点が評価されるべきである。高島にとつて土着の世界である北国は、あくまでも自身の経験や記憶と密接に結びつき、それを多数の読者に向けて開示していく場合、個人的な経験や記憶が詩の世界の広がりや限定してしまう可能性がある。つまり、独善におちいる危機を孕んだモチーフ、それが（北方）であった。モダニズムの手法は、高島の詩を粘着質で個人的な歴史から解き放ち、「個人的な北国」を、多くの読者に送り届けることのできる「詩の世界の（北方）」にまで研ぎ澄ませることを可能にしたのではないか。そのストイックな作風を、例えば北川冬彦は「男性的」と表現したのかも知れない。

さらに、高島の（北方）に関する詩は、東京で出版されたことから、都市生活者の視点からみたエキゾチックな世界をあえて現前させることに力点が置かれていると考えることができる。そこには自分の故郷を形象化して都市生活者の前に現前させたいという高島の思いがあったのではないか。都市生活者が内包する頭の中で描かれた北国の姿、つまり都市生活者が内包する地方のイメージを詩に結晶化させることによつて、東京の詩壇において独自の作風を作り、他の詩人との差異化を図ることができたのではないか。戦略的、と言えば言い過ぎかもしれないが、自身の内奥に広がる自然の風景を自らの詩的特徴として中央詩壇に立つこと

ができたことは、高島にとつては大きな自信にもつながら
たはずだ。

『北方の詩』の〈冬〉には人間の生活はほとんど描かれて
いない。徹底した寒冷の風景が様々な手法で定着されて
いる。なぜか。それは恐らく、誰が読んでもそこに厳然と
して存在する〈北方〉の姿を描くことを心がけた高島の創
作方針が息づいているからではないか。慣習に塗り込めら
れ、情に揺れ動く人間の生活の断面は、ここではあえて描
くことが抑制されていると私は考えるのだ。

六 詩集『山脈地帯』の〈冬〉 人間と自然

私は、『北方の詩』が余人の解釈を許さない屹立した〈北
方〉の形象化であり、同時に都市生活者が夢見る〈北方〉
のイメージを映し鏡にして書かれた詩集であることを指摘
した。「母」(母は／傷みやぶれた手風琴です)のように無
季の作品で、かつ母親に対する思慕を含んだ作品ももちろ
んあるが、冬をテーマにした作品のほとんどが、抑制され
たりリズムによって支えられている。

しかし、第二詩集である『山脈地帯』(旗社出版部 昭
和十六年二月二十日)を読むと、同じ〈北方〉をモチーフ
にした作品でも、『北方の詩』に比べて人間の物語を意識
的に描くダイナミズムが見て取れる。「山脈地帯 第一章」
を読んでみよう。

あんな曇り雲が光るのは
あれは山脈の雪のせいだ

曇り雲それ自身に発光体があると考えるのは

それは君の画かきとしての感覚のせいだ

本当の雲そのものは鉛色なんだ

どんなに白く見える雪だって

鉛色としての一種の光の要素をもっているんだ

それは色そのものとして受ける感覚より
温度を失っているという冷却感のせいかも知れない
だからこの裸木の立木なども
雲の陰影の色というより雪の陰影の色といった方がた
しかなんだ

(ところでこんな雪の地方では

何でもかんでも陰影を帯びてくるものなんだ

たとえば魂にだってあの裸木以上の陰影がさす)

だからあの山脈の壁々にある陰影などは

この地方の風景を現すに最も重要なシンボルなんだ

それは冷却感を表象することよりも

心理的な意味における神秘感にとつて重大なんだ

時々小鳥があゝの山脈の脊の上で叩き落とされるのは

あれは冷却感よりそのような神秘感のためかも知れな
い

もつと云えばあれは鳥さえ落とすような鋭い刃物をも
っているんだ

(君にいつかはなしたろう

N村の美也子さんが雪の山脈の中で死んだことを

美貌で人間である美也子さんは勿論鳥とは一緒に出来
ないけれど

そのような神秘的な刃物で切られたことはたしかだね

しかし雪が解けてから美也子さんは鳥のように骨ばか
りになつていった

どつちかと云えば雪国の人は悲劇になれているね

これで一たん嵐になったら悲劇だなどという生やさし
いものじゃないんだから

東京生まれの君にもそれはわかるだろう)

この麓の村の人たちは死ぬことなどはなんとも思つち
やいなんだ

それはあらゆる自然現象と同じようにごく自然なこと
だと思つている

生とか死とか、そんなことは考えられないんだ
その意味ではこの村人はニイチエ以上に超人だよ
都会生まれの君が、その上芸術家である君が感ずる感
覚などというものもこの村では一本の髪の毛より
も無用なものなんだ

彼らは子供を生んでそして死んで行くばかりさ
だからかえってこの雪の色がこんなに凄味のある陰影
を僕らに与えるのかも知れない

恋愛だって恋愛それ自身としてはけっして感じて恋愛
なんかしていないんだ
だからあの山脈の脊の上で鳥が凍死するのもあたりま
えかも知れない

悲慘といえばこれ以上の悲慘がないね
（だがたつた一人美也子さんだけは考えたんだ
——しかし考えるものはここでは生きてゆけないんだ
結局鳥のように骨ばかりになるか狂うかより他に手が
ないんだよ

そして相手の男は君どうなったと思う？
風は裸木をゆりうごかして吹いて来た
平原の雪がうずまきのような形で浮き立ち
どっしりとした雲が少しずつ山脈の脊の上で光った腹
を見せながら位置をかえはじめる

（その男はね、美也子さんのような直接行動には行け
なかつたんだ。卑怯といえは卑怯だがね。
——しかし、結局哲学に入つて行つて今ではもう流刑
人のようになつてしまつてゐるさ。

ここでは知性は必ず一種の復しうを受けるんだ。自然
と文化の闘いと云うかね。ここではそれ程自然の偉力
というものは絶対的なんだ。自然にそむく者のことご
とくは手ひどい目に会ふのさ。考えてみれば無茶な話
だがね。それ程無智はここでは絶対的なんだ。都会生
活者の君にはこういうことはちよつとわかりにくいか

も知れないがね。そろそろ嵐になつて来たぞ。これは
物凄い吹雪になるぜ。あ、その男が僕だつていうのか
い？そんなことはどうでもいいじゃないか。ただ君に
この風景を写生して貰うために、そしてこの風景たち
の陰影を説明するために云つたまでの話さ。さああの
森まで歩こう。あそこのアトリエにはもう火の用意も
してあるはずだ。そしてあそこでは充分に、君の素晴
らしいタツチによつて、この雪の山脈地帯の風景の再
生が見れるとこまないようじゃな（だ）
雪にめりこまないようにしたまえ
君も知性人の一人だから、自然はどんな風にもこの自然
自身の陰影を増すための復しうをしないともかぎ
らないね
あぶなかつたら僕につかまりたまえ
（第一章終わり）

附記 作者は第一章、第二章、第三章、夜明けを意図
せる第四章まで書きしが、意に満たず後日を期しここ
に第一章のみを発表す。

この物語風の長詩を読み進める上で、とりあえずは内容
を二項対立に整理してみることが分かりやすいだろう。

・美也子	↑↓	男
・自然	↑↓	文化
・雪の地方	↑↓	東京（都会生活者）
・無智	↑↓	知性
・直接行動	↑↓	哲学

厳然たる自然の前ではあらゆる価値、思想、知性、美貌

は何の意味も持たない。この詩には、知性に寄りかかり「考えること」にとらわれる近代人を相対化する自然の力が描かれている。北方の山脈はその「陰影を増す」ために「神秘的な刃物」によって生き物のいのちを奪いその肉を土へと還元させる。そういったあらゆるものに平等に働く自然の力の下で生きていくということが、北方に生きる人々と自分たちとっては当然のことであり、都会に生きる人々と自分たちを差異化させることのできる要素であることが語られる。北の山麓に生きる人たちは「死ぬことなどなんとも思っちゃいない」存在であり、「死」は「あらゆる自然現象」の一つに過ぎず、「子供を生んでそして死んでいくばかり」の人生であるとは詩は言う。自我や個人を土台とした近代的な恋愛の意識はそこにはなく、共同体の中で行われる生殖の営みによっていのちをつなぎ、世を去る。知性に支えられた近代的な生活を志向する価値観はそこには見られない。しかし、ここで私が措定した二項対立はあまりにも単純である。なぜならば、この詩の中で描かれている「北方」はあまりにも原始的で、まるで「北方」には「文化」や「知性」が存在していないかのように語られているからだ。富山で育った高島高が、北国に対してこのような平面的な認識しか持ち合わせていなかったとは考えにくい。ゆえに、ここで描かれる「北方」もまた、やはり『北方の詩』において指摘したように、あえて東京を基準とした物差しで語られていると考えることができるのだ。「北方」||自然||無知||と「東京||文化||知性||という極端な物差しがここでは採用されているのだ。都市生活者から見た北国の異質性、他を受け付けない絶対的な新世界の存在を高島は意識してこの詩の世界観を構築していると考えられる。もし、北国を基準として観の考えるならば、北国には北国の文化や民俗に根ざした知性が存在するはずだが、この詩の中ではそのような伝統的な地方文化に、おそらくは意図的に触れてはいない。

ただし、この二項対立に収斂されない存在として「美也子さん」「君(画かき)」「僕」が描かれていることには着目してよいだろう。厳然とした北国の冬をエキゾチックに描いた『北方の詩』との方法的な違いもまた、そこに発見することができよう。

生まれ、子孫を残し、死んでいくだけの習俗の中、「美也子さん」だけは「考えたんだ」と詩は言う。「美也子さん」は「美貌の人間」であり、「直接行動」をとって「雪の山脈」に入り、そこで「神秘的な刃物」で切られていのちを落とした。そして冬が過ぎて鳥のように白骨化した状態で発見された女性である。「美也子さん」が「雪の山脈」に対してとった「直接行動」が何を考えての行動かは明らかにされてはいないが、「無智」のままに生き、子孫を残して死んでいくこの北方の民の中にあつて「恋愛」というものを経験し、それがゆえに自然から「一種の復讐」を受けることになった女性である。自然の力の前に屈する存在の「美也子さん」ではあるが、「僕」はその生き方を記憶に留め、東京から来た「画かき」に話すのである。

「君」は都会からやってきた「画かき」である。「絵かき」である「君」は、この山脈地帯の陰影をアトリエでキヤンバスに「再生」させることのできる技能を持つ者である。そのような芸術性もまた人間の知性の産物であり、「この村では一本の髪の毛よりも無用なものなんだ」とされる一方で、絶対的な存在としての自然を人間の力によって認識、把握することができるとして希望を持って描かれてもいる存在である。絵を描くという行為は、モノを対象化し、その対象に自己を接近させる視点を獲得する知的営為でもある。「直接行動」をとって山に入った「美也子さん」とは異なり、「画かき」は知性による認識の「形態」としての絵画という方法で厳然たる自然と対峙しようとしている。そこには、知による自然の克服の意志が息づいていると考

えることができるだろう。

また、「僕」の位置を整理するならば、かつて「美也子さん」と恋に落ちたかも知れない存在であり、「哲学に入り」「流刑人」のようになってしまった存在である。かつまた「君」という「画かき」をこの山脈地帯に誘い、その陰影の深さを教えて絵に描かせようとすする存在でもある。そして最終行の「あぶなかつたら僕につかまりたまえ」という言葉からも分かるように、都会の知性を持ちつつもこの山脈地帯を生き抜くことができる土着の生活感を持った、いわば「自然と文化の闘い」の中を自由に行き来することができる人物として描かれている。高島高の伝記に還元すれば、この「僕」は東京と富山の両方の生活を知った高島自身の投影ということが出来る。

いずれにせよ、この「山脈地帯 第一章」には詩集『北方の詩』とはまた違った魅力がある。その魅力とは、(北方)の中に(人間)が息づいていることである。また、東京生まれの人間と北に生きる人間とが明らかな形で対置され、近代人がよすがとしている知性の脆弱さを自然の猛威と比較することで浮き彫りにしている。このような姿勢は『北方の詩』には見られなかった要素である。抑制されたリリズムの『北方の詩』、人間のドラマを物語風に描いた『山脈地帯』。この二つの詩集における(冬)の様相を比べてみれば、それだけで高島高の表現の幅の広さ、その詩集に付与すべき意図を選択する意識の確かさが分かるというものだ。

詩集『山脈地帯』からもう一篇、「故郷挽歌」を読んでもみる。

故郷挽歌

—— 僕はこの若き日の詩篇を愛するがゆえに憎む

雲は低くて暗く

その上光るのは

あれは立山連峰の雪のせいだ

こんな重たい空気はめったにあるものではなく

(つるぎたてやま)

こんな鋭い山脈系はめったにあるものではないとい

うことは

この地方の風景画家たちのエスプリらしいが

ところで僕はたった今午後三時五十分着の

上野発列車から下り立ったばかりの旅の男だ

列車つかれの眼窓には

はるか山脈の頂上の雪の層がきらきら光り

この停車場の古風なことは

いつまでたってもまがった針の柱時計や

朽ちた四角柱の陰影やこわれた窓の窓ガラス

窓ガラスの外の積荷の陰には

幼なじみの×町のTさんやNさんがいるようだけれ

ど

僕はなるべく知らないふりをしたので

切符を渡すと帽子を真深くかむり

さて雪道を先ず山麓の方に向けてとりたいたいと思う

町の中は今もやっぱり魚屋さんやお菓子屋さんや

銀行や荒物屋さんでにぎわっているだろうけれど

僕は今でも帰郷者でもなく成功者でもなく

一介の行きずりの旅の男だし

又町中自転車や乗合自動車をさけたりするのがうる

さいし

それにもまして町湯の噂たちに花をさかせてよるの

は業腹だ

僕の生れた町だというのはあの雪の中の灯だけでけ

つこう

あの灯たちを一つ二つとかぞえながら

今日はせめて夜中まであの山麓の雪道でもあてどな

くさまよい歩いてみよう

この詩には、詩集『北方の詩』の時点であえて抑制され、控えられたいた表現が堰を切ったようにあふれ出ている。抽象的な表現はむしろ避けられ、あくまでも具体的な表現が採用されており固有名詞の使用が目立つ。例えば「立山連峰」や「(つるぎたてやま)」などの詩語を見れば、はつきりと富山県の自然が連想される。この具体性はどこから来るのか。私は、第一詩集において(北方)の厳然たる(冬)を世に問うた高島は、むしろ自らの内奥・記憶・愛憎に従って、故郷富山を具体的に対象化することを試みていると考えるのだ。

固有名詞の使用によって舞台は富山であることが限定された。上野発の列車に乗って東京を後にした「僕」。その「僕」は、上野駅との比較の中で故郷の「停車場」を「古風」だと言いつながら、「まがった針の柱時計」や「朽ちた四角柱」、「こわれた窓の窓ガラス」に懐かしさを感じている。そして、「僕」は自分自身のことを「帰郷者でもなく成功者でもなく」、「一介の行きずりの旅の男」だと規定する。知り合いのいる場所を避け、ひとり「雪道を山麓の方に向けてとりたいと思う」と言い、「今日はせめて夜中まであの山麓の雪道でもあてどなくさまよい歩いてみよう」と感じ入る。

この詩において「僕」は故郷に対して「帰郷者」「成功者」という意識を持っていない。むしろ、ひとり「雪道」を歩く「旅の者」、つまり「歩行者」としての自己を見出ししている。人から離れて、故郷の(冬)を歩行する東京在住の富山県出身者。東京と富山という二つの空間によって二重にアイデンティファイされた存在は、同時にどちらの土地にも自身の居場所を見出せない宙づりにされた存在でもある。題名にある「挽歌」とは、富山に生まれながらも富山に「帰郷」することができない者として規定された「僕」

自身を葬る告別の歌を意味するだろう。「僕はこの若き日の詩篇を愛するがゆえに憎む」というサブタイトルは、愛憎入り混ざる「若き日」の自己との決別の意を含むと解することも可能だ。

ところで、故郷には二種類ある。一つは事実としてその人が生まれ育った場所である。戸籍や履歴に従って規定された故郷のことだ。もう一つは人が自ら主体的に決定していく故郷だ。必ずしも生まれ故郷でなくとも、後天的に選択された故郷意識のことである。そのことを考えると、この詩の中の「僕」は、生まれ育った故郷富山すらも「帰郷」の対象とすることができずにいることが分かる。換言すれば、故郷富山を「ふるさと」として選択するだけの理由が自身の中に見いだせずにいる、ということだ。あるいは、東京での「成功者」でない自分は故郷に対して凱旋できないという負い目を感じていることから、富山を「故郷」であると規定することができずにいると考えることもできる。

「せめて」、雪道をひとり夜中まで、あてどなくさまよい歩くことが「僕」にとつての慰めであるならば、この歩行は、故郷富山と東京の両方から脱落しそうになつてどこにも帰属することができないと感じるひとりの人間の姿を描いていると言えるだろう。同時に、「僕の生まれた町だ」というのはあの雪の中の灯だけでけっこう」という最低限かつ謙虚とも言える認識の中には、「生まれた町」が存在することの確認によって自分というものの根幹をとらえ直し、さらなる「旅」の途上へと向かう静かな納得と、まだ明確な形こそ持っていないが、来るべき出発への助走を讀み取ることもできるだろう。

「めったにあるものではない」「重ったい空気」を含んだ「鋭い山脈」、つまり故郷富山の持つ希有の暗さとそこに降る雪の冷たさは、「僕」の孤独な歩行をひそかに後押ししている。

七 まとめ

〈冬〉が我々にもたらすものは何か。そのような問いのもと、この文章は書かれ、高島高の詩は読まれた。

今回、『北方の詩』、『山脈地帯』という二つの詩集の一部作品を取り上げて〈冬〉について考察した。『北方の詩』は厳然たる自然の創出が目指され、まるでひとつの揺るぎない風景画が描かれたと言ふことができる。そして、高島が詩壇から注目されるに至ったこの第一詩集が、東京の出版社から刊行されていることからうかがえることとして、高島が都市生活者から見た北方としての富山を意識して、きわめて抑制された表現で厳しい寒さや暗い風土を現前させたということが挙げられる。また、モダニズムの手法を用いることによつて、故郷というあまりにも近すぎる対象と適度な距離を保つことが可能になり、それが『北方の詩』の研ぎ澄まされた世界を構築することに役立ったことについても言及した。

さらに、『北方の詩』が風景画だとすれば、『山脈地帯』は人間の劇が具体的に描かれた物語性に富むことについても指摘した。特に、具体的に東京、富山を示す地名が詩の中に出てくる作品においては、二つの土地に挟撃された近代人独特の孤独や葛藤が包括されており、作中人物の心のひだもまたより複雑なものとして描かれている。

高島は、『北方の詩』によつて示した〈冬〉の景色の中に、『山脈地帯』においては人間の内に流れる血のぬくもりを付与したと言える。今回取り上げた二つの詩集を読んだだけでも、高島の詩人としての技法の豊かさを知ることができ、かつ詩集ごとに表現の方向性を統一、選択する知的な判断が働いていることを感じることができ。

高島高、たしかに〈冬〉の詩人である。

1 若き日に詩を井上靖が詩を書いていたことについては、多くの研究者が触れている。福田宏年の『井上靖評伝覚え』（集英社 一九七九年九月一〇日）、近藤周吾の「井上靖と源氏鶏太（一）」富山 詩壇における邂逅を中心に（『富山文学の会 第四回ふるさと文学を語るシンポジウム』報告書「富山文学の会編」二〇一三年三月三日）などがある。

2 「詩と詩論」第三冊（昭和四年三月七日発行）に載せられた北川冬彦の「新散文詩への道―新しい詩と詩人―」には、「語と語。句と句。行と行。これらががっちり結合される。煉瓦のやうに、セメントは強くきかせなければならぬ。プランは、幾度、変更されてもいい。」の箇所がある。また、旧来の詩に対して、「新しい詩の構成法がきびしく追究されれば、追究されるほど、無闇に行をかへ、連を切ることの必然性が失われてくる。そして外観は、散文と殆ど異ならないものとなる。ここに真の自由詩への道の鍵が藏はれてゐるのである」という立場から批判を加えている。

3 立野幸雄『越中文学の情景』（桂書房 二〇一三年十月）

4 高島高編「文学組織」第二号（昭和二十二年十二月二十日）の「編集後記」には、編集者である高島の近況や時節に応じて感じたことが断章風に書かれており面白い。「冬」に関する記事も多く、高島の季節に対する感性を身近に感じる事ができる。「もういよいよ冬だ。北アルプスは日増しに白蠟色の冷感を深めてゆく。立山の頂上にはだよう雲は毎日、雪が髣髴とす。」などの記述を読むと風土の像が髣髴とす。

5 伊勢功治は『ふるさと文芸―あゆみと高島高』（滑川市教育委員会『ふるさと文芸』編集委員 平成二十五年三月）の中で「北方の詩」について触れ、その独自の生命観について言及している。また、「この詩に描かれたものは新しい山景の発見であり、言語によつて構築された詩人の

精神世界です」と評価している。他、多くの評言が『別冊
焰のように生命燃やした詩人 高島高』(立野幸雄編集
高嶋修太郎発行 桂書房 二〇一三年一〇月一五日)にま
とめられている。

6 『北方の詩』(ボン書房 昭和十三年七月一日)の「序」
において北川冬彦は、高島高のことを「新詩壇には稀に見
る男性的詩人」だと評している。

7 成田龍一は「都市空間と『故郷』」(『故郷の喪失と再
生』青弓社 二〇〇〇年五月三一日)の中で、「故郷の概
念の成立は移動がおこなわれることによって始まる」とし、
故郷というものが「事後的に、自分が移動した後に発見さ
れる」と論じている。また、「しかし何回も移動をくりか
えし故郷の概念が形成されてくるなかで、必ずしも出发点
が故郷になるとは限らない」とも論じている。